

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
 大学院生研究
 2006年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	フランス文学	専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	現代心理学部・教授		宇野 邦一 印		
自然・人文の別	自然 ・ 人文		個人・共同の別	個人 ・ 共同 名	
研究課題名	生の軌跡—ミッシェル・フーコーの『言葉と物』をめぐって				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・フランス文学専攻・博士課程後期2年次		千條 真知子 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2006 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

この研究においては、ミッシェル・フーコーの探究における「生」、「身体」の問題系の所在を明らかにし、さらにフーコーにあって重要な「空間」の概念を関係させて考えていくことを主な課題としてたてている。

この問題を紐解くために、まず『知への意志』において登場する、「生—政治学」という概念を精査し、そこから「生」、「身体」といった問題を抽出し、『監視と処罰』における「身体」概念とともに、フーコーの眼差しを把握していった。次にフーコーの研究の転回点を画す方法論である「系譜学」と「身体」の関係を考察した。そこから立ち上がる「生」における「空間」を初期フーコーの『言葉と物』の分析と併せて展開させている。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[生] [身体] [力の場(権力)としての歴史]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

I 現在性への問い

ミッシェル・フーコーは、その著作である『知への意志』(一九七六年)の最終章において「生-政治学」という概念を提示している。これは古典主義時代における主権者の法的権利という形態での権力から、以後、大きく変貌を遂げた権力の新しい形態を指している。フーコーはそれを端的に、「死なせるか生きるままにしておくという古い権利に代わって、生きさせるか死の中へ廃棄するという権力が現われた」と定式化する。つまり、近代(一七世紀以降)の権力システムが目指すものはもはや「生殺与奪」の権利に代表される「死」なのではなく、私たちの「生」そのものだということである。

現代における私たちの「生」を取り巻く状況は、資本主義社会の恩恵を受けている限りにおいて、「技術」の飛躍的進歩と不可分のものだといえるだろう。私たちは、延命・生殖医療、遺伝子治療、臓器移植、果てはクローン技術さえ可能にしようとしている。確かに、「生きること」が問題であるのだ。この意味においても、フーコーの「生-政治学」

という思考は極めて現代的なものと考えることが出来るだろう。

本研究においては、フーコーが提示したこの、「生-政治学」概念を起点として、ここから「生」に対する問題化を抽出し、この後半期におけるフーコーの問題提起を初期、とりわけ『言葉と物』等の主著作との関連において読解することを試みている。また、フーコーにおける「生」の問題化を現在性の文脈においてどのように捉え、この問題を開いていくかということも課題である。

II フーコーにおける「生」概念(「身体」概念)

フーコーの提出する「生-政治学」にあって、この「生きさせる」、「生産網」としての権力の対象とされるのが「生」であった。フーコーは、『知への意志』のなかで「生-政治学」に更に二つの下位区分をたてて説明を加えている。すなわち、十七世紀に登場する権力が、「解剖-政治学」と呼ばれるもので、これは人間の身体への「規律」(「訓練」)をその特徴としたものとされる。次に、「生-政治学」は、十八世紀中葉に形成される権力の新たな形態で、この権力は人口という統計学を利用した集団の様々な生物学的プロセスを標的としている。(一般的に「生-政治学」、「生政治」というとき、これら二つを総称していると考えられる。)

ここに、権力が対象化する二つの「生」の局面が明らかとなっている。それが、ほとんど機械としての「身体」と生物学的プロセスとして眼差される「人口」である。

しかし、これらの「身体」、「人口」とは、権力が個別的かつ全体的に「生」を取り込もうとする戦略的傾向において生ずる「生」にほかならない。従って、権力の効果としてのこれらの「生」を、権力に対する抵抗の拠点とすることは「権力の生」の要求にしかならないのであり、また「生」を「権利」として主張すること自体も、「権力」のシステムの変容に対応していないことをフーコーは述べている。

すなわち、フーコーの『知への意志』において「生」とは、それが「何であるか」を述べられるような形而上学的対象として現われるわけではないのである。また、ジョルジョ・アガンベンも指摘しているように「生」に関する哲学の記述を系譜学的に辿っても、この概念の定義付けは決して問題化されていないし、或いは、され得ないものとして留まっているのである。(ex.ニーチェ、ベンヤミンの議論における「生」概念の観点)これはフーコーにおいて、「身体」についても同様に考えることが可能である。これは権力論の観点から、『知への意志』と問題を共有する著書でもある、『監視と処罰』(一九七五年)において分析することが可能である。徹底して「規律・訓練」の技術に貫かれた書物という『監視と処罰』において「身体」は重要な役割をもちつつ登場してくる。「身体」はこの権力技術の対象として新たに発見された、とさえ記述されているのである。しかし、それにも拘わらず「身体」とはいかなるものかという問題提起は提示されることはない。フーコーにおいて「身体」は、やはり「虚焦点」(渡辺守章)のようにして現われるもの

研究成果の概要 つづき

なのである。従って、この書物のなかでたとえ「身体」が華々しく登場したとしても、それは自己同一性の根拠としての「主体」の代替物として登場するわけでは微塵もなく、また、「身体」が問題なのも「身体」そのものが問題だからというわけではないのである。

周知のようにニーチェ以来、「真理」への態度と同様、本質性への問いは、フーコーにあってつねに周到に避けられねばならないものとして最も警戒されるべき問いの形式なのである。

しかし「生」が問題であり「身体」が権力の対象であるというとき、その問題化の対象でありつつ同時にその対象が空位であるかのようなものについて、私たちはどのように考えることが出来るのであろうか。

Ⅲ 系譜学的思考の「身体」

フーコーの探究は大きく分けて三つの転換期を経ている。これは、フーコー自身も述べているように「知」、「権力」、「主体化」の次元である。フーコーにおいて「生」や「身体」の問題が表舞台にあらわれるのはニーチェに依拠する、「系譜学」の方法論と同時的である。或いは、それらは勿論『言葉と物』や『臨床医学の誕生』にもあらわれているが、「危険」と隣り合わせのものとしての「生」や「身体」は系譜学的思考以来顕著なものとなるといえよう。当然、「真理」ももはや、中立的なものではありえず、それは「暴力の帰結」にすぎない。ここに、「力の次元」が開かれることになるからである。

「系譜学」の方法が「起源」(Ursprung)を退けるのは、それが本質性、「その物自体」の追求を付随させているからであり、また「起源」は真理の場であるという公準に浸されているからである。このような方法において「歴史」は目的論と対立する「歴史」である限り、重要な役割を担ってあらわれるのだ。つまり、フーコーは「系譜学」概念においてこの「歴史」を少しも手放したりなどしていないのである。そしてこの意味での「歴史」こそ後期フーコーにおける「人間」の「歴史」なのであり、以後『知への意志』などで語られる「知と権力に貫かれたものとして」の「歴史」として記述されることとなっている。

アガンベンがフーコーの「生—政治学」に触発されて、興味深い「生」の思考を続けており、「生」に関する「系譜学的」探究をおこなってもいるのだが(『開かれ』)、それはフーコーにおける「系譜学」の試みとは分岐していくものだと考えられる。フーコーにおいて、「歴史」が決定的に「力の場」でもある限り、アガンベンの思考にはこの「歴史」的観点(その「始まり」に低さをもつ「歴史」でもある)が含まれていないからである。

Ⅳ フーコーにおける「空間」

このフーコーにおける「系譜学」においてフーコーは重要な指摘をしている。「起源」と対立するものとして提示される「由来」(Herkunft)は「肉体と結びついている」というのである。「肉体、さまざまな出来事の刻みこまれる平面(言語はそれらをうち出し、観念はそれらを分解させるのに対して)、自我の解体の場(～)、不断に風化状態にある量塊。)(「ニーチェ、系譜学、歴史」)平面とも量塊とも示される「肉体」という「身体」は、絶えず刻み込まれ、風化すると言う意味でひとつの「空間」、それも均一さをもたぬ、ばらばらの、時には「不意打ち」のような「空間」を現出するのではないだろうか。それは、初めから充溢したものとして現われるのではなく、「ある身体」、それに関わるある「生」にすぎないのである。そこにフーコーの「歴史」が開ける。

「知」の次元の探究である、『言葉と物』において、厳密には「系譜学」の観点はみられないといって良いだろう。しかし、既に「空間」への志向は随所に読み取ることが可能である。この書物の扉を飾る「ラスメニナス」において「空間」、それ自身中心でありながら、それを迂回するようにして紡ぎ出される言説の「身体」といったものが存在していた。ミシェル・フーコーの探究において、「生」、「身体」という問題化は、不連続の「空間」という主題を通じてつねに照応したものである。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ④ 本研究での成果をもとにフランス文学会での発表をおこなう。
博士論文の中間報告書を完成させる。
学会での発表をもとに、紀要に掲載する。